

- (5) 『万葉集講座』五、有精堂「大宰府の歌人たち」拙稿
- (6) 万葉七十九号、昭和四十七年五月「怨恨の歌——大伴坂上郎女の志同する世界——」小野寺静子氏
- (7) 文学・語学六六号、昭和四十八年三月「筑紫歌群素描——巻三・四・六・八と大伴百代——」拙稿
- (8) 日本歌人講座Ⅰ「上古の歌人」所収「大伴坂上郎女」青木生子博士
- (9) 『古代伝説と文学』一一七頁、土居光知博士
- (10) 『上代日本文学概説』一七一頁、大久保正氏
- (11) 国語と国文学、昭和四十四年十月「大伴坂上郎女に関する考察」日野みつ子氏
- (12) 注(7)に同じ。

## 水辺の遊び

——万葉集における三月上旬巳の頃——

林 田 洋 子

万葉集は春の若菜、摘みの少女達に呼びかけた雄略天皇の御製を巻頭に置く。若菜を摘む歌は

春山の咲きのををりに春菜つむ妹が白紐見らくしよしも

(8・春雑・一四二一・尾張連)

明日よりは春菜採まむと標めし野に昨日も今日も雪は降りつつ

(8・春雑・一四二七・山部赤人)

春日野に煙立つ見ゆ少女らし春野のうはぎ採みて煮らしも

(10・春雑・一八七九)

などにみられ、また巻十六には、三月の丘に若菜の羹を煮る九人の娘子と、そこに出会った竹取の翁との楽しい歌のやりとりを載せている。春に萌え出る若菜は若返りの妙薬とされたが、これを採むのは一定期間山野に籠って神聖な生活を送る少女達の仕事であつたらしい。こういう少女達の歌を大伴家持(17・三九六九)と池主(17・三九七三)が

詠んでいる。その中で家持が「春の野の……少女らが春菜摘ますと紅の赤裳の裾の春雨にほひ溼ちて……」と敬語を用いて表現したのは、巻頭歌の「菜採ます兒」「名告らさね」と同様、そういう仕事に掌わる少女達への敬意からであったらう。

ところでこの山野の若菜摘み、野遊び・山遊びに対して水辺での遊びを想わせるものに入玉藻刈る少女Vの姿がある。例えば次の丹比真人の歌とそれに和せる歌、

難波潟潮干に出でて玉藻刈る海未通女ども汝が名告らさね

(9・雑・二七二六)

漁する人を見ませ草枕旅行く人にわが名は告らじ

(同一七二七)

ここにいう「潮干の浜辺」を「岡」に、「玉藻」を「菜」に置き換えるまでもなく、結句の類型は巻頭歌に求められる。それと同時に「旅行く人にわが名は告らじ」と相手をかわした態度をとっている点、こういう場に際した男女の唱和歌の特徴も見出せるのである。また、越中守家持が春の出挙の為に諸郡を巡行した時、

雄神川紅にほふ少女らし葦附水松の類探ると瀬に立たすらし

(17・四〇二二)

と少女達が雄神川で葦附(淡水の海苔の一種)を採る様子を見て「立たすらし」と歌う。この用語例は父旅人が松浦川で若年魚を釣る少女に出会った時の歌、「年魚釣ると立たせる妹が裳の裾濡れぬ」(5・八五五)や「年魚釣ると立たせる子ら」(5・八五六)等にもみられる。春の河瀬の少女達の年魚釣りには、別火生活の印象に伴う「年占」の意味があるが、敬語の使用や紅の裳を云々する点からも、葦附を採る少女と同様水辺での春の行事らしい雰囲気が偲ばれるのである。この葦附採りや若鮎釣りなどと共に海で行われたのが玉藻刈りであろうと思う。これは同じ頃の浜下りや磯遊び等に残る民俗との繋りも当然考えられるが、それに藻の神事的要素をも合わせて、宮廷の春の水辺の行事における意味を探ってみたい。

## 一 羈旅歌の一素材

さて、玉藻を刈るのは先の丹比真人の歌にもみる如くあまをとめ(海未通女・海処女・安麻乎等女・海人娘子など)の仕事を表すもので、

楫の音ぞほのかにすなる海未通女沖つ藻刈りに舟出すらしも一に云はく夕されば楫の音すなり

(7・雑・一一五二)

これやこの名に負ふ鳴門の渦潮に玉藻刈るとふ海人娘子ども

(15・三六三八・田辺秋庭)

わが背子を吾が松原よ見渡せば海人少女ども玉藻刈る見ゆ

(17・三八九〇・三野石守)

など他にも多く散見するが、この玉藻を刈る情景が海上の羈旅の歌を特色づける一素材となっている点、興味をひかれる。

卷三の「柿本朝臣人麿の羈旅の歌八首」は三津の崎、淡路、藤江浦、稲日野、明石海峡など難波から瀬戸内海にかけてのもので、その一つに次の一首も含まれる。

珠藻刈る敏馬を過ぎて夏草の野島の崎に舟近づきぬ

(3・雑・二五〇)

一本に云ふ、処女を過ぎて夏草の野島が崎に慮すわれは

別伝は卷十五(三六〇六)と同じであるが、「玉藻刈る敏馬」を「玉藻刈る処女」とも歌い換えられるには何らかの根拠があろう。

敏馬は現在神戸港の東に当る海岸で、「島伝ひ敏馬の崎を」(3・三八九)「妹と来し敏馬の崎」(3・四四九)などにもみえるが、ここは式内社敏馬神社(神戸市灘区岩屋町)があり、その神名に因んだものとされる(澤瀉博士、万葉集注釈)。このみぬめはみぬま・みぬは・みつめ・ひぬま・みるめ・ひぬめ等と変化した一群の語と同じく、水の女神或いは神女なる巫女の意で、それは聖水をもって貴種の禊を助け、御子の出現の時、産湯の事に奉仕する(水の女)の名から来ており、同時にそこが禊の聖地でもあったことは三津(御津)の地名と共に既に説かれている(折口全集第九「水の女」)。「摂津国風土記逸文」(美奴壳松原)には、神功皇后が筑紫に出立されるに当って神教を授かり、新羅征伐に成功したので、この神を託宣の船と共に祀った、という伝えもみられるが、水の霊能をよくする女神が浦や崎に祀られる時、当然海上の平安を守る神としての信仰も寄せられることになる。次の田辺福麻呂歌集の「敏馬の浦を過ぎし時作れる歌」は、そういう恐き場所に対して手向けをする敬虔な意図に発している。

八千棹の 神の御世より 百船の 泊つる泊と……敏馬の浦は 朝風に 浦波騒き 夕波に 玉藻は来寄る、白沙清き浜辺は……見れども飽かず……百世歴て 偲はえゆかむ 清き白浜 (6・雑・一〇六五)

まそ鏡敏馬の浦は百船の過ぎて往くべき浜にあらなくに

(同・一〇六六)

また同じ題詞の赤人の歌

御食向ふ 淡路の島に 直向ふ 敏馬の浦の 沖辺には 深海松採り 浦廻には名告藻刈る 深海松の 見まく

欲しけど 名告藻の 己が名惜しみ 間使も 遣らずてわれは 生けりともなし

(同・九四六)

ここでは相手を思う心情を導く為の序詞の部分ではあるが、敏馬の沖や浦を云々する。そして福麻呂のは百船の停泊する所と定められた敏馬の浦の、朝夕の情景を歌いその浜辺を讚美したもので、いずれもそこに深海松・名告藻・玉藻を詠み込むことよって敏馬が強く印象づけられているのである。船旅において目に触れる島や崎々、浦や浜辺や磯、波・風・潮騒・漁り火(舟)・鳥など謂ゆる矚目発想の歌が多いのは当然であるが、中でも藻やそれを刈る海女通女を云々することは、その情景にたまたま出合ったからというだけでは、やはり後に触れるように海上の神事に関わる一要素といえる。次の赤人の歌、

玉藻刈る辛荷の島に島廻する鵜にしもあれや家思はざらむ

(6・雑・九四三)

この辛荷の島(兵庫県揖保郡御津町、室津の海上)も須磨、明石、藤江と続く瀬戸内海沿岸の重要地点に位置しており、やはり敏馬の場合と同様、「玉藻刈る」は海上の要所要所を過ぎる時に歌われるべき約束の語の一つであったとみられる。しかもこれが単なる羈旅歌に限らず行幸の時の歌にも見出せるのは、一層意味深い。

やすみしし わご大君の 常宮と 仕へまつれる 雑賀野ゆ 背向に見ゆる 沖つ島 清き渚に 風吹けば 白

浪騒き 潮干れば 玉藻刈りつゝ 神代より 然ぞ尊き 玉津島山

(6・雑・九一七)

右は聖武天皇の紀伊国行幸(神亀元年十月)の時の赤人の作。玉津島山(現在和歌の浦玉津島神社の背後の眞供山)は当時海中にあった為、沖の島とも呼ばれ、特別の尊崇を集めた場所であったらしい。作者は離宮のある雑賀野から後方に見らるこの玉津島を、神代の昔より渚には白波が騒ぎ潮干には玉藻刈る事を繰り返して来た、こういう尊い山だと讚美し、反歌では、

沖つ島荒磯の玉藻潮干満ちて隠るひゆかば思はえむかも

(同・九一八)

と満潮になったら波に隠れてしまふだろう玉藻を思う。また、同島を歌った「玉津島見れども飽かずいかにして包み持ち行かむ見ぬ人のため（？・雑・一二三・藤原卿）」にみられる「見れども飽かず」は吉野を代表とする宮廷讃歌の常套句であるが、他の行幸地にもそれが適用されるのはそこが一つの聖地とみなされたことを意味しているよう。これは次の長歌（神龜二年十月重持千年）、

鯨魚取り 浜辺を清み うちなびき 生ふる玉藻に 朝風に 千重波寄り 夕風に 五百重波寄り 辺つ波の  
いやしくしくに 月に日に 日に日に見とも 今のみに 飽き足らぬやも 白波の い開き廻れる 住吉の浜

（6・雑・九三二）

また同じ難波宮讃歌（天平十六年か。田辺福麻呂歌集）、

やすみしし わご大君の あり通ふ 難波の宮は……浜辺を近み 朝羽振る 浪の音騒き 夕風に 櫂の声聞ゆ  
……御食向ふ 味原の宮は 見れど飽かぬかも

（6・雑・一〇六二）

にも気付くが、「朝風に（朝羽振る・朝風に）」「夕風に（夕浪に）」「みれど飽かぬ」などこうした折の応詔歌や羈旅歌に共通の詞章であり、加えて「玉藻に寄る波（或は波に寄る玉藻）」もそれを特色づける重要な表現となっている点に注目される。それは聖地との繋り、また後述の如く海藻類が神事と密接に関わることによるが、これに加えて、

名守隅の 船瀬ゆ見ゆる 淡路島 松帆の浦に 朝風に 玉藻刈りつつ 夕風に藻塩焼きつつ 海未通女 あり

とは聞けど 見に行かむ 縁の無ければ……われはぞ恋ふる 船楫を無み

（同・反歌・九三六）

玉藻刈る、海未通女、とも見に行かむ船楫もがも浪高くとも  
と笠金村が印南行幸の時（神龜三年九月）ひたすら見に行きたいと願ったあまをとめ達の存在も無視出来ない。彼女等は難波行幸の時にも姿をみせている。

海未通女棚無し小舟漕ぎ出らし旅のやどりに楫の音聞ゆ

（神龜二年十月、6・雑・九三〇）

あり通ふ難波の宮は海近み漁童女等が乗れる船見ゆ

（天平十六年か、6・雑・一〇六三）

そしてこういう少女等が裳を濡らして玉藻を刈る姿から、単なる海の労働ではなくある種の神事に奉仕している光

景が思い浮ぶのである。「玉藻刈る敏馬」を別に「玉藻刈るをとめ」と伝えるのも、そうしたイメージの濃い場所であったことによるのではないだろうか。また、玉藻を刈る少女達を「あまをとめ」と呼ぶ時、実際の海人の少女の意の外に、一つのニュアンスを持った語であつたらしい事も想像される。

## 二 藻とまつり

そこで、藻もに総称される海藻類（海藻・名告藻・海松・魚布・海苔・浜菜・浜藻など）が祭祀や儀式、行事などに深く関わっている点に触れておかねばなるまい。先ず宮廷関係では延喜式・踐祚大嘗祭にみえる、

御禊の料

雑海菜八斤

齋院の八神の幣

海藻二斤

由加物の器の料

海藻・滑海藻十二斤、鹿布一端（阿波）

神御に供する雑の物

海菜十兩（多加須伎）、昆布宮四合、海松宮六合、紫菜宮四斤、海藻宮六合

悠紀・主基両殿の供膳

海藻の汁漬、海藻羹

右をはじめ、祈年祭の神の幣、月次、神今食（小斎の給食）、御贖、大被、神膏、相膏、新膏などの四時の祭祀、或いは伊勢齋宮、賀茂齋院の御禊、被の料と、主だった儀式は勿論、小祀、臨時祭に至るまで広く用いられている。また、「青海原に住むものは、鰯の広物・鰯の狭物、奥つ藻菜・辺つ藻菜に至るまで……」（巻八・神祇八）の如く祝詞の常套句に定着しており、その重要性が伺える。

更に神事と海藻との密接な繋りは「和布刈り神事」にみられる。これは山口県の住吉神社（下関市一宮町）・福岡県の和布刈神社（門司市和布刈岬、以上旧正月元日）と島根県の簸川神社（簸川郡大社町旧正月五日）に伝わる祭で、大晦日の夜、神司達が松明を掲げ和布刈り鎌を持って海に入り、和布を刈り取って元日の神饌とし、或いは陸と島との間に漁船を連ねて船橋を架け、それを神司が渡って和布を刈り取って来るというもの。この和布は昔朝廷に供えて宝祚の無窮を祈ったとも、祭前には厳しい忌み籠り期間を定めたなど伝えるが、もとは和布によって浄めを行なう神事であつたとされる（年中行事辞典）。九州地方で元日早朝に行なう若潮、迎えは、海に出て潮水や砂、海藻を持ち帰って禊の

印とし、或いは潮水を浸した海藻で浄めるといふもので、若水迎えと同様生命の若返りを願った行事であろうが、また、神馬藻カンイダラを立春の日に神前に供える「出石卯日祭」(兵庫県出石郡出石神社)や、さらには「佐太御座替祭」(島根県八束郡佐太神社九月二十四日)の、祭の当日迄の禊齋の期間中、海水、海藻を抜具とする事など、何れも藻に籠る清浄な力をそこに認めての神事や行事であったといえる。宮廷の儀式の中で大嘗祭や齋宮・齋院の御禊・被など河の辺で行なわれるものは特にこうした信仰との深い結びつきを示すものであろう。

また、出雲にかかる枕詞に「やつめさす」(景行紀歌謠)があるが、これは「八海藻ヤツメサス(立)す」の意とされる。それは崇神紀の神託(六十年七月)、「玉萋鎮石。出雲人の祭る、真種の甘美鏡。押し羽振る、甘美御神……」という中の「玉萋しずし」が「玉藻沈し」の意であり、出雲地方の称詞的な意味で伝えられた枕詞とみられる事に密接に関わるといわれる。即ち、藻の中に沈んでいる出雲人の祭る誠の上等の鏡鏡という如き、出雲人の神祭に藻が不可欠のものであった印象が、こういう枕詞を生み出したわけであり、日御碕の和布刈神事をも合わせて興味深い。それはこの地方がアズスキタカヒコの御禊の場所―御津をはじめ、特別の禊の聖所として観想注4)されていたことと不可分の関係にある。神宝の奉獻を怒った出雲振根が、弟を殺そうとして游泳カブみする場所が藻の多く生えている止屋の淵と伝えることも藻と禊の関わりを暗示するものに違いない。

なお民俗の方では、五月の田植えの神祭に、女達が物忌みの為齋屋に籠る時、聖域の印に草や注連縄と共に海藻を軒に懸ける事や、穂かけの神事(神刈上げ・田刈り)の時、稲穂に海藻を添えるといふ風習などにも、藻の果す大きな役割が伺われる。

### 三 春の水辺

先に触れた若潮迎え(オシオイなども)や、又は祭に先立つ水辺での禊などは一般に浜下り(ハマイデ・ハマイデマツリ)と呼ばれているが、中でも春に行なうものは磯遊びや海ゆきなどと一連の、一日中、河原や海辺に出て飲食を共にして遊ぶという行事である。沖繩国頭地方の浜下りはその日に限り家での仕事を禁止され、必らず浜に出て遊び、

海産物を食べねばならぬと伝える（年中行事辞典）。

源河奔川や、水か。湯か。潮か。

源河女童の 御すぢどころ

と歌われる源河節も、この行事を背景としたもので、それは清明節の節の水（節の若水・節のしち水。すぢ・しぢ・しぢゅん・しぢるなど若返る意）で身褌の水浴をする少女達―源河女童を歌ったものという（折口全集二「若水の話」）。節の日に若水を浴びたり浜下り（汐干狩）をして共食することは沖繩童謡にもみられる（「沖繩童謡集」七五）。

ところで、これら浜下りを含む春の水辺の遊びは、三月三日に多く行なわれている。まず九州西側の沿海地方（甌島から対島）の磯遊びをはじめ、宮城県（牡鹿半島）・対島（阿連）の磯祭、長野（下伊那郡）の三月場などがあげられる。また、浜下りの一種、三月遊びは沖繩の女の節供で女あそびともいい、御馳走を持って海辺で歌や踊りに興じるが、この日に催される三月踊りは五歳位から成年の女子までによる豊年祈願の行事とされている。同じく竹富島ではこの日をサニチと称し、老婆を除いて総て海に出、舟で飲食をしたり歌うなどして遊ぶもので、またこの日には魚貝類が持ち切れぬ程獲れるという（沖繩竹富島の話）女性民俗の会、『日本民俗学会報五』。女が必ず海に出るいわれは、昔、村の娘が蛇の化身と結婚してその子を宿した為に浜下りをして清めたことによるとするが、宮城や対馬の磯祭と共に、やはり女性の褌ぎを意味する一面をみせている。そしてこの日が魚貝類の豊漁を約束された日であったのは、山口県（大島郡）の磯遊びにおける磯の口明き（磯開き）との関連を示し、また三月踊りが豊年祈願を目的としたことなども加えて、戸外での飲食という別火生活の印象と共に豊漁・豊作祈願の為の物忌みの日であったことも考えられる。それは同じ日の花見・山行き・山磯遊びや四月初旬の山遊び・山慰み・山いさみ・山見の朔日など、高い所に登って海をみたり山や磯に出て飲食をし、山の花を採って来て家に飾るといふ一連の行事が農作業の前の物忌みであることと似通っている。中でも四月八日の福島県（浜通り）の「浜降り神事」には、山いさみなどの風習と共に農業神（祖霊）を迎えての予祝的要素が指摘されているのも、<sup>注6)</sup>これらが異質の行事でなかったことを物語っている。

春籠りと呼ぶのが豊作祈願の祭であり（長崎県志岐郡）、また見晴しのよい磯山で酒を飲んで遊ぶことをもそう呼ぶのは（三月四日、同北松浦郡）、春のこうした行事の内容を端的に言い表わしており、<sup>注7)</sup>春事（旧二、三月の雨降りにする



節供や、三月中旬の頃山野に出たり、舟遊びをする。にも、同じ要素が窺えるのである。

春の水辺の遊びは、季節の変わり目の禊ぎによって、生命力の若返りを願ったのが本来の目的であろうが、それが農村や魚村生活の仕事の区切り目とも重なって豊稔豊漁の予祝や物忌みの日としても考えられて来た訣であろう。そして特に女性との結びつきは、古くより神祭に掌わってきた習慣が民俗に反映したものであり、何よりも禊ぎの水と女―水の女の信仰範囲を出るものではなかったのである。女の節供としての三月三日は、な、でも、ものである人形（形代・雛）に身の穢れを吸収させて川や海に流すことから、次第にそれを飾って祭る室内の行事に固定してゆくものの、やはり身を清める為の大切な一日であったことには変りない。雛壇の前で女子がママゴトをする行事を磯遊び（静岡田方郡）と呼ぶのはこの面影をよく止めている。そしてこの日につきものの蛤や若布は今なお遺る磯の香りでなければなるまい。

#### 四 三月の宮廷行事

謂ゆるこれらは三月上旬の被とも重なる風習で、中国文化の強い強響を受けていることは周知の通りである。例えば『年中行事秘抄』にも漢書志・詩経（国風溱洧）の章句、宋書などを引用して、「三月上旬人間人皆禊於東流水上。自洗濯被除。」、「三月桃花水下。所以招魂統魄被除穢。」とあり水辺での禊ぎの習慣を説明している。そしてこれらは次の記事、「三月三日四人並出水渚沙洲之間。或於国宅池沼之内。為流杯曲水之飲。取參麵菜。汁和密為料。以厭時氣。」と共に曲水の由来となっているが、また「取參麵菜。……以厭時氣。」には周の幽王の故事による草餅献上の事や、前出磯祭（宮城）に草餅を食べる例、或いは「溱洧」の「士与女方秉簡兮」にみる簡（蘭・あららぎ）を採ることなどと同じく若菜摘みの要素も含まれている。何れも陽ざし明るい春を迎えて新しい生命力を希求した一連の風習を伝えるものであろう。

こうした由来をもつ曲水の宴は、宮廷において王侯貴族の風流な催し事の印象が強いが、反面、その記載からは後にもみる如くかなり形式化された感じを受ける。三月三日の記事は顯宗天皇元年を初見とし、以後持統、文武、聖武、淳仁、称徳（高野）、光仁、桓武、平城の時代に亘っている。曲宴には当然ながら水のある場所が必須とされる

が、その中で次の記事が注目される。

天皇御ニ鳥池塘、宴ニ五位已上。賜レ禄有レ差。又召ニ文人。令レ賦ニ曲水之詩。

(聖武・神龜五年三月己亥)

於ニ宮西南ニ新造ニ池亭、設ニ曲水之宴。

(淳仁・天平宝字六年三月壬午)

置ニ酒餼負御井、賜下陪從五位已上、及文士賦ニ曲水ニ者禄有レ差。

(光仁・宝龜三年三月甲申)

宴ニ次侍已上於内嶋院、令ニ文人賦ニ曲水。

(同・八年三月乙卯)

即ち鳥池塘・池亭・餼負御井・内嶋院など池や井が特別に撰定されており、それは、

幸ニ南園ニ禊飲。命ニ群臣ニ賦レ詩。

(類聚国史・延暦十一年三月丁巳)

禊ニ于南園。令ニ文人ニ賦レ詩。

(同・十二年三月辛巳)

右の記事と共にこうした催しの本来の目的が禊ぎにあったことを物語っている。この日に御浴や人形などによる天子の禊祓が行なわれたことは、師光年中行事・年中行中秘抄・建武年中行事にみられるところである。

しかし、宮廷内やその近辺の場所で行なわれる他に、

車駕臨ニ博多川ニ以宴遊焉、是日、百官文人、及大学生等、各上ニ曲水之詩。

(称徳・宝龜元年三月丙寅)

この博多川(河内・伯太川)臨幸の如く実際に水辺に赴くのが原初の姿ではなかったであろうか。この場合は数日に亘っており、二十八日の記事に葛井・船・津・文・武生・藏の六氏の男女二百三十人が歌垣に供奉し、「乙女等に男立ち添ひ踏み鳴らす西の都は万代の宮」、「淵も瀬も清く爽けし博多川千歳を待ちて澄める川かも」の歌に合わせて舞踊したとある。西の都(西京・由義宮)や博多川の讃歌は当然天子への祝福に繋がるもので、顕宗二年の曲宴の記事、「群臣頻称ニ万歳」と共に、こうした折に適切な内容といえる。

この他に三月の行幸は次の記載にも見い出せる。

戊子(五日)に、天皇、難波に幸して、大隅宮に居します。

(応神・二十二年)

丙午(四日)に、茅渟宮に幸す。

(允恭・十一年)

庚辰(三日)に、天皇、近江の平浦に幸す。

(齋明・五年)

甲寅朔、太上天皇幸ニ堀江上。……庚子(十七日)、還宮。

(孝謙・天平勝宝八年)

大隅宮は難波の大隅島にあった宮で、この高台に登って妃・吉備兄媛の帰省する船を望まれた。古事記ではこれを仁徳皇后石之媛の嫉妬を畏れた吉備黒媛が故郷に逃げ下る時と伝え、数首の歌謡を含む物語が展開されている。舞台は何れも難波の海から吉備にかけての瀬戸内海とその島々で、こうした所を船で巡幸することには難波の三津の「八十島の被」との関連が指摘されており、その点で春の海辺の行事とも無関係ではない伝承かと推察される。そして歌謡にみられる「国見や若菜摘み」(紀40、記53・54)の要素も含めてこれらが一連の儀礼であり、それを核にして成長したが、この物語であろうと思う。

次の茅渚宮は交通郎女の居所で、和泉国の沿海にある。この時の郎女の歌に、

常しへに 君も逢へやも いさな取り 海の浜藻の 寄る時々を

(紀・68)

を伝える。いつも稀にしか天子に逢えないことを、浜藻が波に寄る様に譬えたもの。皇后の恨みを思った天子がこの歌を「他人にな聆かせそ」といわれたので、時の人、浜藻をなりのりそも(勿告藻)と呼んだという。歌には単なる比喩に用いられているが、浜藻はこの話のポイントであり、時節・場所柄を考え合わせると、海辺の遊びを背景に生れた歌謡と想像される。

平浦(比良浦、滋賀郡志賀町辺の湖畔)行幸は、額田王の「秋の野のみ草刈り葺き宿れりし兎道の宮処の仮廬し念ほゆる目的か測り難いが、春の湖畔への旅という点に興味がそそられる。

堀江上(難波の堀江・天満川)行幸は河内離宮、難波宮を経たもので(二月十四日から、万葉集には三月七日に馬国人の家で宴した歌(家持・国人・池主)や堀江の辺での作歌(家持)などを載せる(20・四四五七―六四)。また時節は記されないが、元正天皇が難波宮におられた頃、この川を船で折り遊宴した折の歌もみられる(18・四〇五六―四〇六二)。

この他鑑原行幸(聖武・天平十一年三月二日―五日)などもあげられるが、この様に三月の行幸が海辺や湖、川などの水辺が撰ばれ、表立った儀式の他に、舟乗りや遊宴における応詔歌、男女間の歌の贈答、或いは博多川の如き歌垣などが行なわれたのである。そしてこれらが必ずしも上巳の日に限っていず、この頃を中心とした行事であったのは、水辺の民俗にもみた通りである。つまりこうした風習を母胎に中国風の「上巳の被」が受け入れられたのであろう

し、これを背景にした曲宴などもそれらをコンパクトにして形式化され、また当時の外国文学の流行と結びついて宮廷行事の一つに定着をみたものであると思う。他に行幸ではないが、家持の任地・越中の布勢水海での遊覧(天平十九年四月、同二十年三月、天平勝宝二年四月)もこうした行事の一環と思われ、その折の歌に、羈旅・行幸の時の常套的語彙が認められる点も加えておきたい。

なお、こうした習慣を大きく支えてきたものは、海の彼方の理想郷―常世の国に対する古代人の憧れであったろう。そこは祖霊の国であると共にあらゆる生命や豊稔力の源泉地、特に沖繩の海上楽土―ニライカナイの信仰にも顕著であるが、稲の稔りをもたらす国とも観想されている。正月の若水や清明節の節水に代表される、その常世の国から通ってくるという聖水は春の水辺にもひた寄せていたのであり、そこでの年毎の遊びが種々の行事や儀礼に結びつくことは極めて自然であった。

## 五 玉藻刈る少女

さて、こうした水辺への行幸の一つに持統六年(六九二)三月の伊勢行幸がある。出発は三日(戊辰)の予定であったが(二月十一日に詔)、事情により六日に延期、この日より二十日の還幸まで二週間余の日数をかけて志摩の海辺への旅が行なわれた。この折、京に留って詠んだ人麿の有名な歌三首を伝える。

嗚呼見の浦に船乗りすらむ嬉婦らが珠裳の裾に潮満つらむか

(1・雑・四〇)

くしろ着く手節の崎に今日もかも大宮人の玉藻刈るらむ

(同・四一)

潮騒に伊良虞の島辺漕ぐ船に妹乗るらむか荒き島廻を

(同・四二)

これは遠い行幸先での光景を想像しての歌であるが、かつて作者も従駕したであろう嗚呼見浦や答志、伊良虞の島などの海浜で、舟に乗り玉藻を刈る宮廷の少女達の生き生きとした動きが鮮やかに表現されている。玉裳の裾は別伝に赤裳の裾(15・三三六二〇)とあり、又、紅の赤裳裾引き(9・一七四二)、紅の裳の裾濡れて(5・八六一)などの如く女性の纏う長い衣裳をいうが、このような浜辺の光景は、

大夫は御狩に立たし少女らは赤裳裾引く清き浜辺を

(6・雑・一〇〇二)

と赤人の作にもみられ、これが三月の難波宮行幸の折（聖武天皇・天平六年三月十日）であつたのは注目される。さらに、

黒牛クロウシガサ瀉潮干の浦を紅の玉裳裾引き行くは誰が妻  
(9・雑・一六七二)

黒牛クロウシガサの海紅にほふももしきの大宮人し漁すらしも  
(7・雑・一一一八)

前者は紀伊国行幸の時（持統・文武天皇大宝元年十月）の歌（十二首）の一、後者の同地での藤原脚某の歌もやはりこういう行幸に従駕した際のものと思われる。何れも浜辺の風光に映える裳の美しさが印象的であり、その女人達のあざりする姿が作歌の大きな動機となっている。黒牛瀉は人麿歌歌集の挽歌「紀伊国にして作る歌四首」の中にもみられる（9・一七九六・一七九八）、宮廷人の度々訪れて遊んだ海辺であつたことが知られる。

こうした春の海浜での大宮人の漁り―玉藻刈りが、行幸の目的の中心をなすと思える襖ぎに關係した重要な仕事であつたことは容易に推察出来よう。玉藻の玉は通説では美称であるが元来は靈魂を意味するもので、神祭や儀式に深く関わる語、また紅裳を玉裳と表現する点にもそうした特別の行為に掌わる気持が汲みとれる。この玉藻を刈る姿は、

葛飾の真間の入江にうち靡く玉藻刈りけむ手児名し思ほゆ  
(3・挽・四三三)

右の赤人の歌った手児名テコのテコという語は手子后信仰と關係深い姫神の名から来ているといわれ、注即ち神のをとめてしての一つの行為が玉藻刈る事であつたと考えられる。また次の、

打麻を麻績の王白水郎なれや伊良虞の島の珠藻刈ります  
(1・雑・二三)

うつけせみの命を惜しみ浪にぬれ伊良虞の島の玉藻刈りをす  
(同・二四)

罪有つて配流となつた王を人が哀傷した歌と、王の和なせた歌。その玉藻を刈り、或は食す姿は伊良虞の島で贖罪の生活を送る期間の、大切な襖被の行為の表現とみることが出来よう。そしてこれは隠岐に流された小野篁の、「おもひきやひなのわかれにおとろへてあまのなはたきいさりせんとは（古今・十八・雑下・九六一）」や、須磨流謫の際、在原行平の有名な、「わくらばに問ふ人あらばすまのうらにもしほたれつゝわぶとこたへよ（同・九六二）」に受け継がれて、流され人の歌の特質となつていく。さらにこうした人の姿は、

ある朝、いその方よりかげろふなどのやうにやせおとろへたる者よろばひ出きたり。もとは法師にて有けると覺へて、髪は空<sup>ソラ</sup>さまへおひあがり、よろづの藻くづとりつゝあて、をどろいただいたるが如し。……片手にはあらめを(捨)ひろひもち、片手には網うどに魚をもらふてもち……。

と、鬼界ヶ島で有王がみつけた僧俊寛の様子を描いた部分〔平家物語 卷三〕に色濃く投影されており、このような表現が写実性とは異った深い意味合いを含む点、見過し難いのである。

麻績王の場合、持統天皇の行幸の時と共に、伊勢の海がこうした淨疲力豊かな場所として意識されたことを示している。また、

いざ児ども香椎の瀉に白細の袖さへぬれて朝菜採みてむ(6・雑・九五七・旅人)

時つ風吹くべくなりぬ香椎瀉潮千の浦に玉藻刈りてな(同・九五八・小野老)

これは香椎宮参拜の後、香椎浦での作歌であるが、これらも朝菜(朝の食物の意で、ここは海草)や玉藻を刈る事によって神に奉仕する気持を表したものとみられる。

つまり、人麿のへ玉藻刈る少女には、常世の波の重き波寄せる伊勢の海の、磯の香に満ちた海藻によって天子の生命への魂触りに奉仕しようとしている姿が思い浮ぶのである。そしてこうした行為や姿、又玉藻そのものが、前出(一章)の如く羈旅や行幸に際して歌われる時、崎や浦の神への手向けとなり、或いは宮廷讃歌の一素材に繋がってゆく訣であらう。

その場合この仕事に掌わる人々があまをとめであった点にも注目すべきである。この少女達は先の行幸の他に、

漁する海未通女らが袖とほり濡れにし衣干せど乾かず(7・雑・一一八六)

風のむた寄せ来る波に漁する海人娘子らが裳の裾濡れぬ(15・三六六一)

と歌われ、彼女達の袖や裳の濡れることに主眼がおかれている。これは、

裏がもと乞はば取らせむ貝拾ふ吾をぬらすな沖つ白浪(7・雑・一一九六)

家つとに貝を拾ふと沖辺より寄せ来る浪に衣手ぬれぬ(15・三七〇九)

わが袖は手本てもととほりて濡れぬとも恋忘れ具とらずは行かじ  
妹がため貝を拾ふと血沼の海に濡れにし袖は乾せど干かず

(15・三七一一)  
(7・雑・一一四五)

などの羈旅歌にもみられるが、貝を拾う歌は、

大伴の美津の浜にある忘れ貝家にある妹を忘れて念へや

(文武三年難波行幸1・雑・六八・身人部王)

住吉の粉浜こなの蛸開たこひらけも見ず隠りてのみや恋ひ渡りなむ

(天平六年難波行幸6・雑・九九七)

妹がためわれ玉求む沖辺なる白玉寄せ来沖つ白浪

(大宝元年紀伊行幸9・一六六七)

など行幸の時のにもあり、玉藻刈る事や玉を拾う事も加えて、これら漁りをして遊ぶことが浜辺での大切な仕事であったと思われる。こうした歌の特徴は、

こよろぎのいそちならし磯なつむむざし濡らすな沖にをれ浪

(古今集卷二十・大歌所御歌・東歌一〇九四)

と、磯菜を摘むむざし(少女の意)を濡らさぬよう波に呼びかけた歌などに継承され、しかも大歌所の御歌として収録されている点注目に価する(他に風俗歌にも採録)。

それはとにかく、要するに、単なる海の労働に従事している海人の少女達に対して袖や裳の濡れることを云々するのは不自然で、何か特別の場合の漁りが想像されるのである。

海をとめ玉求むらし沖つ浪恐き海に船出せり見ゆ

(6・雑・一〇〇三・葛井大成)

潮満たばいかにせむとか方便海ワタシの神が戸わたる海未通女ども

(7・雑・一一二六)

少女等が 麻笥アサギに垂れたる 績麻アサなす 長門の浦に…阿胡の海の 荒磯の上に 浜菜ハマナつむ 海人少女ども 纓オビがせる 領巾も照るかに 手に巻ける 玉もゆららに 白桮の 袖振る見えつ 相思オモヒふらしも

(13・雑・三三四三)

右の、波恐しい海に船出したり、神が戸(戸は瀬戸、或は手として岩礁をいうとも)武田博士校註万葉集をわたる少女達、又、浜菜(海藻)を採む少女達が領巾や玉をつけて白桮の袖を振る情景など、ある種の祭に奉仕している姿が目に浮ぶ。領巾や袖を振ることは招魂の呪術に発する行為であるが、特に白桮の袖は、「白桮の吾が衣手を取り持ちて斎へわが夫子ただに逢ふまでに(15・三七七八)」の如く禊齋する時のものであった。つまりこのようなあまをとめ

の姿には海辺の神事との密接な繋りが指摘されており、とすれば浜菜つむ海人の少女達は、即ちへ玉藻刈る少女<sup>注⑧</sup>でもあったといえる。人麿の敏馬の歌（I・二五〇）はこの少女達が敏馬の神に捧げるべく玉藻を刈っていた光景である。また行幸の折々に奉仕してきたのは天子の禊ぎに関わる為であった。これらあまをとめという呼び方には、海を生活の基盤とする人々の他にこうした海辺の神事に掌わるをとめとしての意味が含まれていたのではないだろうか。つまり、海人の少女の資格―水の女に繋がる―で天子の禊ぎの事に掌わる女人と推察するのである。その意味で伊勢の海浜に玉藻刈る宮廷の少女達もあまをとめであった。

丹比真人の呼びかけたのは、この様な少女達で、彼女等もまたそれに合わせた表現で戯れの拒否の歌を返した―多分難波行幸の時であろう、浜辺での楽しい情景が彷彿とする。

玉藻刈る事は本来海人のするひなの仕事であるが、それが宮廷の女人達によってなされたところに、歌人達の雅びと認めた文学意識がある<sup>注⑨</sup>。しかしそれを支える背景に宮廷行事における、特に春三月の頃の水辺の遊びが豊かな土壌となっていることを見過す訣にはゆかないのである。

小論の要旨は昭和四十七年度上代文学大会（五月二十八日）にて口頭発表し、高崎正秀先生の御指導を仰いだものである。その折、諸先生方より貴重な御教示を賜った。ここに感謝の意を表すると共に、今後の研究に生かしたく思う次第である。

注(1) 折口全集第九卷「万葉びとの生活」

(2) 西宮一民氏「八船多気をめぐって」(『万葉』31号)

(3) 武田博士校注『日本書紀二』(日本古典全書)

(4) 高崎正秀先生『文学以前』(著作集第二卷)

(5) 大迫德行氏「浜降り神事考」(『日本文学論究』第30冊)

(6) 注(4)に同。

(7) 今井福治郎先生「海上と鹿島」(『房総万葉地理』)

(8)(9) 中西進博士『柿本人麿』(日本詩人選・2)